校長室だより～燦燦～ №９６４

なべさんクラブ

2024.2.5

なべさんは、思った通り、全国レベルの強豪校でもまれた。きっと、自分が描いたものとは違ったことだろう。それでも、彼はがんばった。努力をした。自分で決めたことである。誰にも言い訳はできない。それでも、高校２年生だったか、３年生だったか、弱音を吐いたことがある。私には、話を聞いてあげることくらいしかできなかった。

高校を卒業し、彼は福島に戻ってきた。そして、ソフトテニスプレーヤーとして、動き出した。相変わらず、情熱は衰えてはいない。そのうちに、子どもたちへの指導にも携わるようになった。自分のお子さんを２人とも小学生のジュニアクラブに入れた。ますます熱が入った。

大会で、テニスコートに行ったり、本校のソフトテニス部保護者と話したりしていると、「なべさん」という言葉が出てくる。最初は、彼だとはわからなかったが、話を聞いているうちに、すぐに彼のことだとわかった。「なべさんて、私の教え子ですね」

どうやら、自分の娘たちを含めて、市内の中学生たちに教えているようだった。そのクラブの名前が「なべさんクラブ」だった。自分でつけたのかどうかはわからない。なべさんという愛称が、彼にはぴったりである。名は体を表す。

なべさんクラブの練習に行ってみた。複数の学校から集まってきている集団である。なかなか指導がむずかしい面がある。やる気があり、自ら希望してきているためか、話をよく聞くし、指示を聞いてよく動く。

一番は、なべさんの人柄であろう。彼は、中学１年生の頃から変わらない。優しい。優しさがにじみ出ている。したがって、私とはタイプが違う。指導の方も、キャリアが長いため、的を射ている。子どもたちをよく見ている。

単独チームではないため、みんなで勝つぞとはなりにくい。イメージは、ソフトテニスクリニックだろうか。もっとこうすればよくなるよ。こういう場合は、こういった戦術が有効だよ。そんなニーズに応えているように感じた。

現在、部活動の地域移行が少しずつ進んでいる。これを前進させるためには、指導者の確保が課題の一つである。なべさんのような指導者が求められている。近い将来、なべさんクラブとして、中体連に登録し、大会に出るようになったりすれば、指導のスタンスも変わってくることだろう。ぜひ、昔の私とは違う、優しい中にもやるべきことはやる指導で、大会に出て勝ち進んでほしい。我が教え子であるなべさんに、これからの指導者のあるべき姿を見た。